

平成 30 年度 病虫害発生予察 特殊報 第 1 号

病虫害名： クビアカツヤカミキリ *Aromia bungii*

対 象： ウメ

1. 病虫害情報の内容

クビアカツヤカミキリの発生と被害を、東京都多摩地域のウメにおいて初めて確認した。

2. 発生経過

- (1) 平成 30 年 7 月に東京都多摩地域の生産園内のウメにおいて、カミキリムシ科の成虫の発生と、枝及び樹幹には虫孔(成虫の脱出孔)や多量のフラス(幼虫の糞と木くず)の排出を確認した(図1、図2、図3)。成虫の形態的特徴から、クビアカツヤカミキリ(*Aromia bungii*)と同定した。
- (2) 本種は平成 25 年に愛知県、平成 27 年に徳島県、平成 28 年に大阪府、平成 29 年に栃木県、群馬県及び埼玉県で特殊報が発表されている。都内でも平成 27 年に河川沿いのサクラで初めて発生が認められ警戒中であった。

3. 形態

成虫は体長 28～37 mm。通常、前胸背板を除き光沢のある黒色を呈する。前胸背板は明赤色だが、個体により黒色となる(黒色個体はわが国未報告)。触角と脚部は暗青灰色。前胸背板には4つの小突起を備え、両側部の突起は側方に突出し目立つ。

4. 生態

樹木内部で蛹から羽化した成虫が6月上旬から8月上旬に出現し、交尾・産卵する。産卵は幹や樹皮の割れ目に行い、8～9日後には卵が孵化し、幼虫が樹木内部に食入する。幼虫期間は2～3年、春～初夏の摂食が盛んであり、この時期にフラスが多く見られる。

5. 被害

幼虫が樹木に寄生し、幹や枝の内部を食い荒らし、時に枯死させる。
海外での報告では、サクラ、カキ、ウメ、モモ、スモモ、ザクロ、オリーブ、ヤナギ、コナラ等多くの樹種に寄生するといわれている。

6. 防除対策および注意

- (1) 羽化した成虫の分散防止及び新たな産卵防止のため、樹幹部にネット(容易に切れない目開き4mm以下のもの)等を巻き付ける。この際、幹とネット等の間が密着していると、幼虫や成虫が食い破るため、幹に密着させないように巻く。
- (2) 定期的に園内を見回り、ネット内の成虫はハンマー等で速やかに撲殺し、ネットの外の成虫は捕殺する。捕殺する際は、刺激臭を放つ場合があるので注意する。また、成虫を防除対象とした薬剤を使用する。
- (3) フラスが排出される幼虫食入孔を見つけた場合は、針金等で刺殺するか、幼虫を防除対象とした薬剤を使用する。なお、現在の登録農薬は以下のとおりで、成虫に対しては1剤のみである。不明な点があれば病虫害防除所や普及センターに連絡する。

○幼虫を防除対象とした薬剤

薬剤名 (成分名)	適用作物名	適用病虫害	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	フェンプロパトリンを 含む農薬の使用回数
ロビンフッド (フェンプロパトリン)	うめ	カミキリムシ類	収穫前日まで	2回以内	樹幹・樹枝の食入孔にノズルを差し込み噴射	5回以内(但し、噴射は2回以内、散布は3回以内)
	果樹類*	カミキリムシ類	収穫前日まで	2回以内	樹幹・樹枝の食入孔にノズルを差し込み噴射	2回以内
ベニカカミキリムシエアゾール (フェンプロパトリン)	うめ	カミキリムシ類	収穫前日まで	2回以内	樹幹・樹枝の食入孔にノズルを差し込み噴射	5回以内(但し、噴射は2回以内、散布は3回以内)
	果樹類*	カミキリムシ類	収穫前日まで	2回以内	樹幹・樹枝の食入孔にノズルを差し込み噴射	2回以内

*かんきつ、りんご、なし、びわ、もも、うめ、おうとう、ぶどう、かき、マンゴー、いちよう(種子)、くり、ペカン、アーモンド、くるみ、食用つばき(種子)を除く

○成虫を防除対象とした薬剤

薬剤名	適用作物名	適用病虫害	使用量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法
パイオリサカミキリ	果樹類	カミキリムシ類	1樹当り1本	成虫発生初期	—	地際に近い主幹の分枝部分等に架ける

7. 参考文献

愛知県(平成 25 年)、徳島県(平成 27 年)、大阪府(平成 28 年)、栃木県、群馬県及び埼玉県(平成 29 年) 特殊報



図1 クビアカツヤカミキリ成虫



図2 排出されたフラス(幼虫の糞と木くず)



図3 株元に排出されたフラス